宇治拾遺物語

出典

▼底本

新日本古典文学大系「宇治拾遺物語　古本説話集」（三木紀人・浅見和彦他校注、平成二〔一九九〇〕年、岩波書店刊）によった。

▼成立・編者

「宇治拾遺物語」の成立時期については、説話文学研究一般の手続きによって、歴史上の事実と関わる内部徴証や他の説話集との本文関係を検証するほか、序文の記述と併せて検討が加えられているが、定説と言うべき結論に至っていない。建保年間（一二一三〜一二一九）から承久年間（一二一九〜一二二）の頃と見る説が多く、また、後の増補を想定する説もある。編者は不明だが、成立の事情については、序文に「宇治大納言物語」と言われる散逸説話集に、「後にさかしき人々書き入れたるあひだ、物語多くなれり」、「さるほどに、今の世に、…大納言の物語にもれたるを拾ひ集め、また、その後のことなど書き集めたる」ものが「宇治拾遺物語」なのだと記している。

▼内容

収録説話数は百九十七編で、類別されてはいないが、冊数がまちまちな諸本において、百三話までを前半とし、それ以下を後半とする分け方は一貫している。先行説話集に典拠のあるものが百四十三話あり、中でも八十二編が「今昔物語集」とほぼ同文と言えるほど近い関係にある。他に「古本説話集」と二十三話、「古事談」と二十話が直接または間接の伝承関係にある。仏教説話と世俗説話とに大別した場合、世俗説話が過半数となる。それらが順不同に雑然と並べられているようでもあり、編者の問題意識や連想が自ずからにじみ出てくるような配列となっているところもあり、「宇治拾遺物語」の文学性の一つのポイントになっている。そこには、転変する時代の底に変わることない人間の心理が的確に描き出され、会話部も多く、文体もそれにふさわしい和文体である。

参考文献

❊ **教師用**

▽**注釈書**

新編日本古典文学全集「宇治拾遺物語」小林保治他　小学館　平八

新日本古典文学大系「宇治拾遺物語　古本説話集」三木紀人・浅見和彦他　岩波書店　平二

新潮日本古典文学集成「宇治拾遺物語」大島建彦　新潮社　昭六十

校注古典叢書「宇治拾遺物語」長野嘗一　明治書院　昭五十・五十五

日本古典全書「宇治拾遺物語」野村八良

「宇治拾遺物語」（角川ソフィア文庫）中島悦次　KADOKAWA　昭三十五
「宇治拾遺物語」（岩波文庫）渡辺綱他　岩波書店　昭二十六〜二十七

▽研究書

説話文学の世界「宇治拾遺物語」長野嘗一他　笠間書院　昭五十四
日本文学研究資料新集「今昔物語集と宇治拾遺物語」小峯和明編　有精堂　昭六十一
「説話文学と絵巻」益田勝実　三一書房　昭三十五
「中世説話文学論」西尾光一　塙書房　昭三十八
「論纂　説話と説話文学」久保田淳他編　笠間書院　昭五十四
「説話文学の構想と伝承」志村有弘　明治書院　昭五十七
「説話の講座」小峯和明他　勉誠社　平三〜五

▽入門書・研究案内

鑑賞日本古典文学「今昔物語集・宇治拾遺物語」佐藤謙三編　角川書店　昭五十一
鑑賞日本古典文学「中世説話集」西尾光一・貴志正造編　角川書店　昭五十二
研究資料日本古典文学「説話文学」大曽根大介編　明治書院　昭五十九
別冊国文学「今昔物語集・宇治拾遺物語」三木紀人編　学燈社　昭六十三
別冊国文学「新古典文学研究必携」市古貞次編　学燈社　平二

❊生徒用

「宇治拾遺物語」（角川ソフィア文庫）中島悦次　KADOKAWA　昭三十五
「完訳日本の古典　宇治拾遺物語」小林智昭・小林保治・増古和子　小学館　昭六十一
新潮古典文学アルバム「今昔物語集　宇治拾遺物語」小峯和明・藤沢周平　新潮社　平三
日本の古典を読む「宇治拾遺物語　十訓抄」小林保治・増古和子・浅見和彦　小学館　平十九

図版解説　**〈不動明王二童子像〉**

青蓮院蔵。一一世紀。絹本著色。作者未詳。国宝。絹本の濃茶褐色の地色に、朱と丹で激しく燃え盛り揺れ動く炎が描かれ、その中央に、剣と絹索を持した忿怒の形相の青不動明王が座し、右に矜迦羅童子、左に制吒迦童子を配する構図となっている。⇩P15

〈慕帰絵詞〉

西本願寺蔵。観応二年（一三五一）作。絵巻。一〇巻。本覚寺三世覚如の伝記を描いたもので、覚如の子慈俊撰。絵は藤原隆昌・隆章、詞書は三条公忠ら。一、七巻のみ文明十四年（一四八二）の補作で、絵は藤原久信、詞書は飛鳥井雅康。挿絵は寺院での調理風景。囲炉裏に鍋がかけられ、右奥には膳が用意されている。⇩P16